

- Univ. of Nebraska Press), p.70.
- 9) Kathleen L. Nichols, "The Celibate Male in *A Lost Lady*: The Unreliable Center of Consciousness" in *Critical Essays on Willa Cather*, John J. Murphe (ed.)(Boston: G.K.Hall, 1984), p.187. James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1987), p.349.
 - 10) Willa Cather, *A Lost Lady* (N.Y.: Vintage, 1990), p. 7. 以後、*A Lost Lady* からの引用は全てこの版により、カッコ内にページ数のみ記す。
 - 11) Eudora Welty, "The House of Willa Cather" in *The Art of Willa Cather*, Bernice Slote & Virginia Faulkner (eds.)(Lincoln: Univ. of Nebraska-Lincoln and Univ. of Nebraska Press, 1974), p.16.
 - 12) Nichols, p.188.
 - 13) Nichols, p.191.
 - 14) Willa Cather, *Willa Cather on Writing* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1988), p.102.
 - 15) Cather, p.103.
 - 16) Woodress, p.348.

異常を来たし、精神病院へと連れ去られていく。白は悲劇的な結末を暗示する色でもある。しかし、Forrester 夫人は結局は時代の変化の中でも生き延びた。美しいまま消えていくこともなく、Niel の視点に閉じ込められることもなく、長い年月の苦勞が顔に刻みこまれた移民の娘 Antonia と同じように、厚化粧と染めた髪に彼女が過ごした年月の長さを刻みこんで、読者の前に立っている。この意味で、“a lady” という立場の違いこそあれ夫人は Cather の描く Antonia をはじめとする移民の娘たちと共通点があり、Woodress が言うところのこの作品のメッセージすなわち「人は変化と共に生き、新しい条件に適応し、避けがたいことを受け入れることを学ばなければならない」¹⁶⁾ という作者の考えを体現していると言える。Cather 本人の「1922年頃に世界は二つに分裂した」という言葉のせいもあり、ともすれば彼女の作品の中の同時代への批判、違和感、追憶的な姿勢がとり上げられることが多いようだが、現実と折り合いをつけてともかくも生き延びていくことも、Cather の作品の重要なテーマのひとつと思われる。

注

- 1) Richard Lehan, *The Great Gatsby: The Limits of Wonder* (Boston: Twayne, 1990), pp.107-110. Henry Dan Piper, *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait* (London: The Bodley Head, 1965), pp.133-135. Tom Quirk, “Fitzgerald and Cather: *The Great Gatsby*”, *American Literature* 54 (December 1982), 576-579.などを参照。
- 2) Andrew Turnbull (ed.), *The Letters of F. Scott Fitzgerald* (N.Y.: Charles Scribner's Sons, 1963), p.507.
- 3) Joseph Blotner, *Faulkner: A Biography* (N.Y.: Vintage Books, 1974), p.130.
- 4) Judith Bryant Wittenberg, “Faulkner and Women Writers” in *Faulkner and Women: Faulkner and Yoknapatawpha 1985*, Doreen Fowler & Ann J. Abadie (eds.) (Jackson and London: Univ. Press of Mississippi, 1986), p.287.
- 5) David Stouck, *Willa Cather's Imagination* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1975), p.59.
- 6) Stouck, p.59.
- 7) Susan J. Rosowski, *The Voyage Perilous: Willa Cather's Romanticism* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1986), p.129.
- 8) Mildred R. Bennett, *The World of Willa Cather* (Lincoln and London:

この論文のⅡ、Ⅲ章では Niel の視点に注意を払うことで彼の視点の限界や偏見、傾向を考えてみた。幾つかの箇所を取り上げて述べたように、Niel の視点や判断をそのまま作者のものとして受け取ることは、表面に書かれてはいないが大切な部分を読み落とすことになるだろう。Nichols の言うように Niel に「変化、成長、大人の性を受け入れることができない性的に抑圧された若者の物語」を読み取ることは確かに可能である。それだけの材料になる彼の背景やエピソードに対する反応を、作者は作品全体で継続して書き込んでいる。ただ、それだけではないというのが筆者の立場である。たとえば、*My Mortal Enemy* のテーマのひとつとしてロマンスと現実をどう関係づけて生きていくかということがある。語り手の女性 Nellie は、子供の頃から恋人 Oswald への愛のために大叔父の豪壮な屋敷と遺産相続を捨て駆け落ちをした Myra の話を彼女に会う前から聞かされて、ひそかにそのロマンスに憧れていた。15歳で実際に Myra 達に会った時のことが一部で、10年後の夫婦との再会が二部で彼女の口から語られる。その年月を通して、夫妻との関わりによって Nellie はロマンスがどうやって壊れていくかを身を持って体験し現実を見る目を獲得したと言えるのだが、この Niel の場合はどうだろうか。追憶の中で現に生きている夫人よりも一時代の終わりと共に死んだ Forrester の方が「現実」(145)に思える彼にとっては、ロマンスと現実は最後まで交わらなかったのではないだろうか。*A Lost Lady* では出来事が順を追って語られるわけではなくエピソードとエピソードの間の空白も多いし、作品の結末での現在の彼の身の上が書き込まれていないのではっきりした結論は出せないが、彼の場合自分の中のロマンスは無傷のまま、周囲にいる現実の人間が変わっていくに過ぎないのだろう。女性の生き方がある期間にわたって年下の語り手の視点を通して語られるという似た構造をもちながら、*My Mortal Enemy* では少女の視点が、*A Lost Lady* では少年の視点が利用されているのは、Cather 作品のロマンスと現実との関係を見る上で面白い点だと思われるので、簡単ではあるが指摘しておきたい。

最後に夫人像である。Forrester 夫人はしばしば白い服を着て登場する。アメリカ文学には白い服の女性が何人か登場する。Daisy Miller、Emily Grierson (“A Rose for Emily”)、Daisy Buchanan (*The Great Gatsby*)、Blanche (*A Streetcar Named Desire*) など、彼女たちの純潔、傷つきやすさ、富などが白い服によって示されている。Daisy Miller はその白い色を守ったまま若くして死んでいく。Emily は結婚できない恋人を毒殺しその死体を寝台に横たえたまま年老いる。Blanche は現実の中では生きられなくなり精神に

IV

Gather の技法の特徴の一つは簡潔化である。その文学論のひとつ “On the Art of Fiction” で彼女は次のように述べている。

Art, it seems to me, should simplify. That, indeed, is very nearly the whole of the higher artistic process; finding what conventions of form and what detail one can do without and yet preserve the spirit of the whole—so that all that one has suppressed and cut away is there to the reader's consciousness as much as if it were in type on the page.¹⁴⁾

Gather の書き方が簡潔ながら暗示力に富む理由のひとつとしては、彼女のこのような芸術観が考えられる。出来るだけ言葉を切り詰めた上でなおかつ、切り捨てた部分が残った部分を通して作者に伝わるように書くこと、これが彼女の意図したことである。上の文章に彼女は「どんな一級の小説や短編もそのために犠牲にされた一ダースものかなりよい短編の強さ（支え）をその内に持っているに違いない」¹⁵⁾ と続けている。しばしば彼女の作品は単純で平明な印象を与えるが、それも意図的なことだとわかる。A *Lost Lady* も例外ではない。注意深く読めば、短い描写や言葉の中に事件、人間関係など様々なことが書き込まれている。

ただ、彼女のこのような技法の姿勢は、どのレベルまで切り捨てられた部分を読み取るかによって作品解釈の曖昧さを生じさせる原因にもなる。幾つかの点で A *Lost Lady* に似ている *My Mortal Enemy* にも同じことが言える。この作品でも一組の夫婦が登場する。若い日に駆け落ちまでして結婚した夫婦だが、時間がたち生活が苦しくなるにつれて二人の関係は変わっていく。夫 Oswald に対する妻 Myra のいら立ちは、表面に書いてあるように彼が最後まで妻に忠実な夫だとだけ読んでいたのでは、読者にはよく理解できない。筋だけ読めば、Myraの方が異常で我儘な性格だということになるだろう。が、病みついた妻に最後まで忠実に付き添っている反面、若い女性とつき合い華やいだ気分になっている自分を衰えた妻がどのような感情を込めて眺めているのか、彼にはわかっていない。語り手の女性 Nellie の押さえた語り口からこの夫婦の表面には表れない関係が伝わってくるが、勿論 Nellie は直接的には語らないし、説明もしない。説明をしない語り手、視点を通して何がわかるかが Cather の作品を読む時のひとつの鍵になる。

人の視点によって異なってくるのである。夫人の身の上を転落とするならば、夫人自体に問題があるというよりも夫人の立場にその原因がある。つまり“a lady”である限り自分で自分の運命を左右するのは難しい。*My Antonia* の Antonia なら精一杯働くことによって、土地からの収穫を増やし生活を向上させることもできるし、夫とも協力して働くことができる。Antonia の友人で同じように移民の娘の Lena Lingard も手に職をつけ仕立て屋になることによって、結婚しなくても生きていくことができる。*O Pioneers!* (1913) の Alexandra の場合も父親の死後家族の先頭に立って土地を広げていくのだから、Cather 作品の女性には女性であるために無力という訳ではないようである。ところが夫人の場合には、周囲と接触をするにしても間接的にしかできない。投資をするにも人に頼むしかないのである。“a lady”の位置を確保してくれるだけの夫がいる限り問題はないが、夫が力を失ったり居なくなったりすれば、夫に代わる人を見つけるか自分自身が何らかの意味で変わらざるを得なくなるのが夫人の立場である。ともあれ、Ivy が夫人の体に手を回すのを目撃した Niel は彼女に軽蔑の気持ちを感じて故郷をあとにすることになる。

結局、悪い噂の的になった後、町から出ていった夫人は再婚する。故郷の町や人々から遠く離れてしまった Niel は、夫人の死後になってようやく偶然に再会した幼なじみの Ed Elliot から夫人の最後の消息を聞く。それによれば、Ed がブエノスアイレスで見かけた時の夫人はイギリス人と再婚して何不自由なく暮らしているようだった。記憶の中で夫人に対する苦い思いも純化され、Niel と Ed は夫人が死後まで再婚相手の夫に愛されていたと知って喜ぶというのが、この作品の結末である。が、この結末部で面白いのは、Ed が自分の目撃した夫人の様子について語る次の一節である。

She was a good deal made up, of course, like most of the women down there; plenty of powder, and a little red, too, I guess. Her hair was black, blacker than I remembered it; looked as if she dyed it. (149)

厚化粧とおそらく染めたらしい黒すぎる髪の毛。ともかくも美しい追憶で終わろうとしているのに、再び夫人はその老いた生身の姿をここで散らつかせている。最後に Niel が夫人のそのような姿をそのまま受け入れられるようになったかどうかははっきりしない。ただ、ここには、最後まで Niel の対象を美化する視点とそこからはみ出す夫人の姿がある。

身はそう思いこもうとしているのかも知れない。が、Gilmann の “The Yellow Wall Paper” を引き合いに出すまでもなく、保護や義務という口実で身近な男性によって表現手段を奪われる女性たちと夫人の姿がここでどうしても重なる。Ellinger を「ついに安全なものを手に入れた卑怯者」と非難しながら次第に感情をむき出しにし、かつますます魅力的になっていく夫人と愛人の唯一の伝達手段である電話線を Niel ははさみで断ち切る。その瞬間人事不省になった夫人を介抱する時の Niel は「彼女を自分の部屋に運びこみ、濡れた服を切り裂き、彼女を自分のバスローブに包み、自分のベッドに入れた。」(115) とある。まるで、他の男から無理やりに取り返した恋人を自分の世界から逃がすまいとするかのようなのである。

次章では、Forrester が再び発作を起こし無力になった屋敷へ町の人たちが入り込んできて、意外にも家の中がみすばらしいことを発見する。外部からの無遠慮な視線も防ぎきれない程、屋敷自体もその住人も弱っている。夫や屋敷という保護を失った夫人については、人々は彼女の飲酒癖を噂話のたねにするほどである。見かねた Niel は一年間休学して夫妻の面倒を見ることにする。

At night, when he was alone, when Mrs. Forrester had gone to bed and the Captain was resting quietly, Niel found a kind of solemn happiness in his vigils.... He liked being alone with the old things that had seemed so beautiful to him in his childhood. (121)

I 部での Niel の読書体験、前章での電話のエピソード、この引用に見られる Niel の幸福感を考えれば、彼が夫妻に求めたものとは、両親にあたる夫妻と彼の三人だけの変化のない世界である。経済的な助けもできず、勿論夫人の恋愛相手になることもない Niel は、年老いた両親を保護する息子という役割でのみ二人に結びつく。が、すべては変化せざるを得ない。

Forrester の死後、Niel、判事を始めとする人々は夫を失いまるで「風であちらこちらに吹き流される底荷のない船のように」(131) になった夫人に驚き、彼女と Ivy が交際するのを非難する。彼女の答えは「毎晩家に一人きりで編み物をするわけにはいかない。」(132) というものである。「夫人がすべての偉大な男の未亡人のように喜んで自分を犠牲にして、彼女が属していた開拓者の時代と共に死ななかったこと」(145) を不服に思う Niel とは見事に違い違っている。これまで繰り返し述べてきたように、Niel にとって夫人は彼の中の物語の登場人物のようではなければならず、そこからはみ出す部分を彼はことごとく否定する。夫人の性質を「浅薄」、その身の上を「転落」と見るかどうかは見る

back to California—and live again. But after that...Perhaps people think I've settled down to grow gracefully, but I've not. I feel such a power to live in me, Niel... I could dance all night and not feel tired... I looked happier than any woman there. They were nearly all younger, much. But they seemed dull, bored to death. After a glass or two of champagne they went to sleep and had nothing to say!... I accepted the Dalzell's invitation with a purpose; I wanted to see whether I had anything left worth saving. And I have, I tell you! You would hardly believe it, I could hardly believe it, but I still have! (106—)

自分にはまだ守るべき何かが残っていると彼女が言う時の「何か」とは、年若い女性たちが疲れて退屈そうにしている時でさえ彼女の身内に残っている活力で、肉体的年齢、時の流れを越えてなおも残る「何か」である。これこそが、この作品で Cather が伝えようとした夫人の魅力だろう。ところが、彼女の言葉を聞いて Niel は「女性たちがまだ若く感じるということについて話しはじめたら、それは何かがこわれたことを意味しているのではないだろうか。」(107) と、それを狭く解釈している。いっきに時間のない世界へ連れ出すことができれば、すべては時の流れの中で変化し朽ちていく、というのが彼の時間感覚である。夫の世話をして年を重ねていく夫人への同情は持ちながらも、夫人の内面に目を向けることはしていない。

同じことが4章での嵐の夜の電話のエピソードにも見られる。嵐と大雨のせいで町から離れた Forrester 屋敷が孤立した夜のこと、判事の事務所で夜更けまで読書をしそろそろ眠ろうとしていた Niel の元へ夫人が訪ねてくる。愛人 Ellinger と Constance の突然の結婚を新聞で知り、彼への長距離電話をかけるために電話を借りに来たのである。Constance との結婚を責めて次第に興奮する夫人の言葉が電話交換手に盗聴されることを恐れて、Niel は途中で電話線を切断する。この時のことはこう描かれている。

For once he had been quick enough; he had saved her. The moment that quivering passion of hatred and wrong leaped into her voice, he had taken the big shears left by the tinner and cut the insulated wire behind the desk. Her reproaches had got no farther than this room. (114)

夫人を救うための行為と理由づけられているが、果してそうだろうか。Niel 自

かけた Niel は Forrester の容貌の変化を認める。

Everything about him seemed to have grown heavier and weaker.
His face was fatter and smoother; as if the features were running
into each other, as when a wax face melts in the heat. (91)

庭に作った日時計を眺めて一日を過ごす Forrester は、もはや時の流れに身を任せているかのようである。一方、外見は確かに年取ったけれども相変わらず独特の魅力がある夫人に再会した時、Niel は「この悲しく避けがたい時代の地上から離れて年と疲労と逆境から彼女を救い出せたら」(92) と痛切に考える。世代交代、西部の変化、夫妻の変化と時の流れを印象づけ、時の流れに抵抗したいとはかなく願う Niel の姿が印象的な導入部である。ところが、夫が弱り家の維持を任された夫人は、以前は立派だった家具も夫と同じように逆に重荷になったことを嘆きながらも、「お金はとても大切よ。まず、そのことを悟って面と向かいなさい。私たちのように結局馬鹿なことにならないように。」(96) と Niel に忠告する。銀行が倒産した時には「ビジネスでのあなたのご決定に私が異議を唱えることはありません。そんなことは何も知らないのですから。」(74) と夫に向かって言っていた時に比べれば、夫というかつての保護者を守らなければならなくなった彼女は夫とは別の意味で変わりつつある。

3 章では夫人と Ivy の関係が親密になっていくのを苦々しく見守る Niel が中心になっている。屋敷の敷地内で夫人になれなれしく振る舞う Ivy の姿を目にする Niel の不快感の理由は、Ivy が夫人との身分差を無視して男女の関係を示す態度を取るからである。鉄道会社の社長を夫人が乱れた服装で迎えることは許せても、朝身なりを整える前の夫人が「袖をまくり上げてむき出しの喉を Ivy の冷たく図々しい視線にさらす」(100) のは Niel には許しがたい。彼の非難に答える夫人は前章での現実的な態度をよりはっきりと示す。5 年契約で Ivy に土地を貸しているのだから Ivy と仲よくする方が实际的であり、さらに彼に頼んでお金をワイオミングに投資してもらっている、というのが彼女の答えである。投資への手助けを申し出る Niel に対して、年は若いけれども気質的には Forrester や判事と同じ Niel は利益を得るという点では役に立たない、と夫人はその申し出を相手にしない。時代変化を見すえてそれに対応しようとする夫人は、このように Niel の性格への理解力も持っている。しかし、逆に Niel に夫人が理解できていないことは 3 章最後での、夫人が自分に残された活力について語った言葉への彼の反応にはっきりと示されている。

You see, two years, three years, more of this, and I could still go

理想」が壊されたことの方が Niel には耐え難い。これまでに見てきたとおり、Niel の視点は客観的で信頼できるというよりも最初からある限界と偏見を持っていると言ったほうがより正確だからである。一方、全知の語り手によって描かれる夫人の姿は、夫人自身の発言も含めて、Niel の視点から繰り返しはみ出している。両者のずれを繰り返し強調することによって、Niel の持つ夫人像の向こうにある夫人の魅力が読者に意識される。これが、読者に夫人の魅力を伝えるための Cather の仕掛けである。そして、ここまで見た限りでは Niel の物語とは、現実を受け入れることができず、次第に自分の内面へと閉じ込められ一種の閉塞状況へと向かう少年の物語である。

デンバーからの Forrester と Judge Pommeroy の帰宅後、人々の心の変化が話題となる。自分を信頼してくれた預金者たちのせめてもの助けになればと信義を重んじて財産を投げ出した Forrester と銀行の倒産に関して自分たちには何の責任もないとする若いビジネスマンたちが対比される。財産を失い、さらに発作を起こした後左半身がよく動かなくなり、言葉が不明瞭になった Forrester の肉体的な衰えは、彼の世代とそのような新しい世代との交代が避けがたいことを示している。“a lady” の身分を保証してくれていた夫の力が金銭的にも肉体的にもなくなった時、夫人はどのように生きるのか。これが二部で展開する物語である。一方、一部の最後の場面では、Niel は夫妻に別れを告げたあとでボストンの大学で建築の勉強をするために故郷を旅立つ。夫人の強さの正体は何なのかと考えながら。

III

Niel が帰郷するまでには 2 年間が過ぎた。本章では作品後半を扱う。Niel の帰郷、時代と人々の変化、Forrester の死と後日談がここでの出来事である。大学の夏休みを過ごすために帰ってきた Niel が最初に汽車の中で再会したのは、今は弁護士になった Ivy であった。Forrester 屋敷の敷地内に借りた沼地の水を干し小麦畑に変えた Ivy の口から、Niel は夫妻の変化を知らされる。沼地の美しさよりも、土地からあがる利益を重視する Ivy との会話の後で、Niel は古い西部を開拓した夢想家達に思いを馳せる。彼らは「偉大なまでに非現実的で」「攻める時には強いが守る時には弱い」(89) 冒険者たちで、今や Ivy を代表とする新世代の意のままになりつつある。帰郷の翌日 Forrester 夫妻に会いに出

all next winter, too...and the next! What will become for me, Niel?" There was fear, unmistakable fright in her voice. "You see there is nothing for me to do. I get no exercise. I don't skate; we didn't in California, and my ankles are weak. I've always danced in the winter, there's plenty of dancing at Colorado Springs. You wouldn't believe how I miss it. I shall dance till I'm eighty.... I'll be the waltzing grandmother! It's good for me, I need it." (63-)

楽しみの少ない生活の中で夫人もまた自分の生活を彩るものを求めている。が、そのような彼女の欲求をNielは認めることができない。彼の読書が示すように、彼の関心はヨーロッパや過去に向かっている。その読書傾向をNicholsは詳しく分析し、Tom Jones、Wilhelm MeisterなどとNielの類似を指摘している。「これらの物語はNielの抑圧された面の形を変えた性的なファンタジーとして働いているように見える」と、Nicholsは彼の性的な欲求を強調している。¹³⁾ ただ、Nielが「人々の考えたことではなく、感じたり生きたりしたことについて大きな関心を持った」(67)り、読書のせいで建築家になりたいと思うようになったのは、読書が彼にとっては実際に生きることの代わりになったからだと筆者は考える。現実から退いて生活の疑似体験ができる読書の世界を発見した彼は、それまで叔父を通じて接していた法律の世界よりも、世間の変化にほとんど影響を受けずにすみそれ自体で完結する建築の世界へと向かうのだ。銀行倒産の知らせを受けたForresterと叔父の判事がデンバーへ向かい家を留守にしている間、Nielは早朝まるでロマンスの主人公であるかのようにバラの花束を夫人に届けに行く。屋敷の窓辺から夫人とEllingerの笑い声が入り交じって聞こえてきた時はじめて二人の関係を悟って、思わず花束を踏みにじった時のNielの反応は次のように激しい。

In that instant between stooping to the window-sill and rising, he lost one of the most beautiful things in his life. Before the dew dried, the morning had been wrecked for him; and all subsequent mornings, he told himself bitterly. This day saw the end of that admiration and loyalty that had been like a bloom on his existence. He could never recapture it. It was gone, like the morning freshness of the flowers....It was not a moral scruple she had outraged, but an aesthetic ideal. (71-)

このように、現実の二人の関係そのものよりも、彼女の行為のせいで「美的な

とその娘 Constance それに Frank Ellinger を交えた席で、Forrester の夫人に対する古風な態度が示される。

She [Mrs. Forrester] was wearing her diamonds tonight, and a black velvet gown. Her husband had archaic ideas about jewels; a man bought them for his wife in acknowledgement of things he could not gracefully utter. They must be costly; they must show that he was able to buy them, and that she was worthy to wear them. (41-)

今の屋敷を持つにあたっての彼の望み - 「私は友人たちが来ることができ、家を魅力的にするために Mrs. Forrester のような妻のいる家を作ることを計画した。いつかはその計画をやりとげると自分に約束したものだった。」(44) - は、Faulkner が後に描く *Absalom, Absalom!* (1936) の Sutpen を思い出させる。財力があることを示すために、また妻にそれだけの価値があることを示すために、彼女が身につける宝石は高価でなければならないというのが、Forrester の考えである。とすれば、Niel が夫人に母の役割を求めたように、Forrester は夫人に生身の女性ではなく自分の地位や家の付属物としての役割を求めたとも言える。

夫人の活力は密かに Ellinger に向けられていた。「山のような」と形容される Forrester とは対照的に、彼は「船の舳先のような鼻」(36) を持ち、「落ち着きのない男性的な活力」(37) に満ち、後の Constance との結婚が示すように「風に合わせて帆の向きを変える」(39) だけの軽やかさがあった。クリスマスの晩餐会の夜も更けた頃、屋敷内での二人の密会は全知の語り手によって暗示的に述べられるにとどまるが、5 章では彼らの逢引は町の少年 Blum に偶然目撃される。ここの夫人と Ellinger との対話では「ひと冬中、寂しく田舎にひっこんで年を取っていくと、楽しいことを思い出したくなる」(53) という彼女の肉声が聞こえる。Niel や Forrester とは違って Ellinger の前では彼女は一人の女性でいることができる。が、「夫人がいる所では退屈さはあり得ない」(58) と信じ、Forrester の妻としての夫人に関心を持つ Niel には彼女の寂しさは見えてこない。Forrester にとっては家は砦で夫人はそれに不可欠な要素だが、夫人にとって家は自分を閉じ込める荒涼とした牢獄でもあり、彼女は次のようにいら立ちを示す。

"Not a word! I can't stand this house a moment longer."... "Oh, but it is bleak!" she murmured. "Suppose we should have to stay here

その解釈によれば「哀れな婦人 (“poor lady”）」(22) と語り手から呼ばれる母を失った Niel は代わりの “lady” すなわち Forrester 夫人に母親の姿を、ついで性的に魅力的な女性を求めるのである。基本的には筆者も Nichols と同じように Niel の母親喪失を彼についての物語の重要な要素と見る。しかし、先に述べた作品の枠組みを考慮すれば、まず、社会階層が彼についての物語に重要な役割を果たしている。母方の叔父 Judge Pommeroy は Forrester の弁護士で、その家を訪問するすべてのおえら方の友人だった。その叔父を通じてのみ Forrester 家と接点を持つことのできる Niel には当然ながら階級意識が強く、物の見方もそれに左右されることが多い。次に、満足に家庭と呼べる場を Niel は持たない。母親だけでなく父親も、家庭という場が人に与える安定感も彼は持たない。従って、Niel が求めるのは母親としての夫人だけではなく、父親としての Forrester も含んだ家庭ということになる。灰色の町に住むからこそ人々が色彩に引き付けられるように、彼の背景の侘しさが彼を Forrester 家と夫人に向かわせる。従って Niel の目は最初から彼が求める夫人像しか見ることができず、そこからはみだす生身の夫人は理解することができないか、批判の対象になる。このような彼の視点の限界は作品の結末まで解消されない。ただし、作者は Niel を批判的に描いているのではなく、夫人に憧れる Niel に共感を寄せている。作家としての Cather は Niel に距離を取り、Garber 夫人を知っていた生身の人間としての Cather は Niel と一体化している。ここにこの作品の曖昧さと奥行が生じてくる。

さて、作物の不作が原因で町の景気が悪くなり、鉄道会社の人々も町には立ち寄らなくなった数年後、19歳になった Niel が紹介される。叔父の判事の元に身を寄せた彼は生涯判事のように結婚しないでいようと決意している。ロマンティックな風貌を持ち、批判的な心の動き方が原因である控えめな態度のために実際よりも少し年上で冷たく見える。このような彼にとっての夫人の魅力は何よりもその笑い声に示されるような活力や鮮やかさにあった。「心地好い音階のように上がったり下がったりする柔らかで音楽的な笑い声」(26)「きゃしゃだが泡立つような活力」(30)「開いたり閉じたりするドアを通して遠い所から聞こえてくるダンス音楽のような笑い声」(32) と、彼女の魅力の特徴づけるのはその動的な変化である。寂しい家庭で育った Niel がこのような夫人に引き付けられるのは自然で、その落ち着きが「山のような」と形容される Forrester にとっても正反対の性質を持つ夫人が愛情の対象となるのは当然のなりゆきだったろう。しかし、Niel と判事が招かれたクリスマスの晩餐会では、Ogden 夫妻

味が変わっていく。とすれば、*A Lost Lady* は家をめぐる物語であると読むこともできる。

このような家や夫妻が人々にとって魅力的に思えたのは、土地からの利益よりも美しさを重視する Forrester がその家に秩序を与えていたからである。敷地内の木々、立派な家畜、草地、それに魅力的で若い妻と、彼は「Burlington Railroad 沿いの灰色の町のひとつ」(3) の住人達が簡単には手に入れられないようなものを持っていた。白い家、木々の緑、夫人の持つ赤い傘と、Forrester 夫妻に関わるものは、色彩のない灰色の町とは対照的である。12歳の Niel が木から落ちて夫人に介抱されるエピソードを述べた 2 章では、彼を始めとする少年達が Forrester 家の敷地内でピクニックをする。季節は夏、「野生のバラは大きく開き、輝いている。」(10) 蝶や鳥たちはあらゆる所を素早く飛び回っている。人が銃を持つことが許されない生き物の楽園である。ここに「水蛇」(10) ついで銃を持った Ivy が登場することから、*A Lost Lady* は楽園喪失の物語が重ね合わされていると読むことも可能だろう。

短い導入部ながら、複数の物語が展開していくことがうかがえる 1 章で作品の枠組みを作った後で、作者は 2 章以降では Niel と夫人との幾つかの出会いの場面を紹介している。2 章では、少年達のピクニックの場面に現れた Ivy がめすのキツツキをパチンコで打ち落とし、ナイフの刃でその目を傷つける。視力を失い、いたずらに騒ぐキツツキの姿を見かねた Niel はひと思いにキツツキを殺してやろうとして木から落ちる。以前から屋敷の内部を見たいと思っていた Ivy から家の中に運びこまれた Niel は夫人の看病を受ける。彼の視点から家具、寝具、カーテンなど部屋の内部が描写される箇所、「部屋は涼しく薄暗く静かだった。彼の家では病気になるとすべてがひどかった。」(20) という文章がある。章末で紹介されているように Niel の家庭背景は侘しいものだった。手当の後の Niel にとって「家は帰るには楽しい場所ではなかった」(21) というのも、自分の財産を失い仕事のためにほとんど家にはいない父親と、おそらく「世界で一番家事能力のない」(21) Cousin Sadie だけが彼の家族で、彼らには「失敗と敗北の雰囲気」(22) が漂っていると Niel は感じていたからである。母親は「クラウン貨幣をポンド貨幣に変える」(22) ために、すなわち成功を夢見てケンタッキーから中西部に来たものの、結局は Niel が 5 歳の時に失意のうちに死んだ。

Nichols は彼の母親喪失体験を重視して、Niel の物語を「変化、成長、大人の性を受け入れることができない性的に抑圧された若者の物語」と見ている。¹²⁾

冒頭で客観的な全知の視点ではなく「私達」の視点を用いていることは、これから述べられる物語が一個人の経験ではなく、ある時代のある地域での人々の共通した経験であることを印象づける。上の引用にあるとおり、この中西部の町にははっきりと区別される二つの社会階層が存在し、この社会階層の別は作品全体で繰り返し強調されている。作品タイトル中の“a lady”という言葉は階級社会を前提にしているからである。言い換えるなら、紳士がいるからこそその配偶者としての“a lady”が存在する。時代が変化し社会階層の区別が崩れていく時、“a lady”の身の上はどうなるのかが *A Lost Lady* で展開される物語でもある。このような社会で鉄道の貴族階級すなわち鉄道関係者によく知られていた Forrester の家は次のように描写されている。

The Forrester place, as every one called it, was not at all remarkable; the people who lived there made it seem much larger and finer than it was. The house stood on a low round hill, nearly a mile east of town; a white house with a wing, and sharp-sloping roofs to shed the snow. It was encircled by porches, too narrow for modern notions of comfort, supported by the fussy, fragile pillars of that time, when every honest stick of timber was tortured by the turning-lathe into something hideous. Stripped of its vines and denuded of its shrubbery, the house would probably have been ugly enough. (4)

この描写で大切なのは、第一に、家自体は素晴らしいものではなく、「そこに住む人々がその家を実際よりも大きく立派なものに思わせた」ことである。Cather の作品には家がよく登場し、重要な意味を持っていることが多い。Welty が指摘するように、家は Cather にとって人が生きてきたことの証で、単なる物ではないのである。¹¹⁾ 第二に、家の実際は現代の感覚では「狭すぎる」ポーチに囲まれ、ちゃんとした木材は旋盤で何かひどい物に変えられる時代の「凝った弱々しい柱」に支えられ、つたや植え込みを取り去れば「十分に醜い」。先に説明されている階級社会の基盤も実は脆く、しかも時代風潮はこの時すでに“honest”とはほど遠いのである。従って、物語の始まる時点は決して理想的な状態ではなく、住人すなわち Forrester 夫妻の後の没落の原因もこの家の描写ですでに暗示されている。社会変化の結果としての没落というだけではなく、夫妻自体の美德も外側の飾りを取り去れば醜くなる家のように見せかけのものだったのではないか。家や家庭は作品全体で度々言及され、次第にその意

二つの視点を利用することで、Niel の夫人に対する幻想とNiel にはまだ知らされていない夫人の実像とのずれが読者に示される。Niel の「経験への入門」はそのずれがなくなった時完了するのである。しかし、Woodress や Nichols の述べるように、二つの視点は作品全体で区別されていると筆者は考える。⁹⁾ むしろ、Niel の夫人に対する見方やその憧れの性質は、客観的な全知の語り手によってアイロニカルな距離を取って述べられることも多く、読み進むにつれてこの作品には夫人についての物語だけでなくもうひとつ Niel についての物語もあることに読者は気づかされる。この場合ずれは最後まで解消しない。

この論文は Niel の視点に注目することによって、そのもうひとつの物語を見つけ出し、「浅薄」ではない夫人像をとらえてみようという試みである。A *Lost Lady* で Cather は簡潔で平明な文体を用いている。作品の構成自体も均整が取れており、一部と二部にはそれぞれ9章ずつある。同じような場面を一部と二部とで繰り返し扱いその間の夫人の変化を印象づけたり、花や宝石など小さな物に意味を込めていたり、説明を極力省き読者の注意力を要求する書き方である。以下、Niel に注意を払いつつⅡ章では一部を、Ⅲ章では二部を、Ⅳ章ではこの論文の結論を扱う。

Ⅱ

1章と2章の冒頭には語り手「私達 (“we”)」が登場する。これは全知というよりはもう少し具体的な語り手である。プレーリーの州にある社会階級について述べた次の引用文では、「私達」に対して投資のために大西洋沿岸すなわち東部からやって来た紳士階級の牧場主たちは「彼ら」と呼ばれる。「私達の偉大な西部を発展させるために」と「彼ら」は言うものの語り手は自分達と「彼ら」を区別し、皮肉な目を向けている。1章の章末でも Forrester 夫妻の身の上の変化を述べたあとで、“He grew old there, —and even she, alas! grew older.”¹⁰⁾ と語り手の感情が示される。

There were then two distinct social strata in the prairie States; the home steads and hand-workers who were there to make a living, and the bankers and gentlemen ranchers who came from the Atlantic seaboard to invest money and to “develop our great West,” as they used to tell us. (3)

い Marian がそのような周囲や夫の変化に伴いどのように変化していくかが、彼女を慕う少年 Niel Herbert その他の登場人物の視点を利用して客観的に語られる。客にとって魅力的な女主人として、あるいは愛情深い妻として紹介されていた夫人が、実は夫の留守中に愛人 Ellinger を家に泊めて密会していたり、夫の死後は新しい世代の物質主義を代表する若い弁護士 Ivy Peters 相手に媚びを売るかのような態度を取るのを Niel は目撃する。彼女の魅力への憧れと彼女の墮落を許しがたいと思う気持ちの間で揺れ続けた彼がついに町から離れ、その後の彼女の消息と死を幼なじみから知らされるのがこの作品の結末である。

第一部 1、2 章の語り手「私たち (“we”)」はいつの間にか姿を消し、それ以後は最後まで折りに触れて Niel の視点を通して主要な場面が語られていくので、Stouck のようにこの話は「Niel Herbert の経験への入門である」⁵⁾ という解釈も成り立つ。彼はまた夫人の性質を「浅薄 (“shallow”)」⁶⁾ と見る。一方 Rosowski は夫人像のとらえがたさを “Ode on a Grecian Urn” の本当の意味のとらえがたさにたとえ、彼女を「ひとつの決まった意味におしこめることはできない」と繰り返している⁷⁾。このような夫人像の解釈の違いは、ひとつには視点的人物としての Niel をどう見るかによる。

Forrester 夫妻は Cather 自身の故郷の町 Red Cloud の創始者の一人であり後にネブラスカ州知事にもなった Garber 夫妻に基づいている。作品においてと同じように夫に先立たれた夫人が亡くなったと知った時、Cather は夫人をモデルにした作品執筆を思い立った。作品執筆について彼女はこう語っている。

A Lost Lady was written in five months, but I worked with some fervor. I discarded ever so many drafts, and in the beginning wrote it in the first person, speaking as the boy himself. The question was, by what medium could I present her the most vividly, and that, of course, meant the most truly. There was no fun in it unless I could get her just as I remembered her and produce the effect she had on me and the many others who knew her.⁸⁾

これからわかるのは、視点の設定に彼女が苦心したこと、次に少女時代の自分に強い印象を与えた Garber 夫人、つまり作品では Forrester 夫人が自分と周囲の人々に与えた効果を再現したいと Cather が考えていたことである。このような執筆の動機や意図のために、視点的人物の Niel すなわち作者自身であるという見方も生じる。つまり、Niel による夫人の解釈すなわち作者の解釈ということになる。Stouck によれば、Niel の視点と客観的な語り手の視点という

に Fitzgerald 自身も「盗用ではない」とわざわざ言明するほど Cather の作品中の表現と自分のそれとの類似を意識していたようである²⁾。また、Cather は Faulkner が最もしばしば名をあげたアメリカ女性作家で、読むべき現代作家が誰かを尋ねられた時、彼は Hemingway, Cather, Thomas Mann, Dos Passos, それに自分自身の名をあげている³⁾。「語りの構造を実験した最初のアメリカ作家の一人」⁴⁾としての Cather の側面にはもっと注意が払われていいのではないだろうか。

にもかかわらず、彼女の作品が実際よりも古い時代のものであるかのような印象を与えるのは、ひとつには彼女の作品ではある価値観が信じられ、しかもその価値観が同時代の社会では通用しなくなっているという意識が濃いからである。評論集 *Not Under Forty* (1936) の序文には「1922年頃に世界は二つに分裂した」という彼女の有名な言葉がある。*One of Ours* (1922) の主人公 Claude の体験する戦争と Hemingway の描く戦争は、いかに違っているか。変質し墮落しかけたアメリカ社会では実現できない理想や美のために戦死する Claude は、たとえば *A Farewell to Arms* (1929) の主人公とは逆方向の道をたどる。内面の理想や美を守るために死ぬのが Claude の生き方で、母親は息子の死を深く悲しみながらも、彼が生き残って醜い現実を見ないですむことにひそかに安堵を覚えるのである。

同時代への違和感は追憶の物語に通じる。*The Professor's House* では初老を迎えた教授が教え子であった青年 Tom Outland を、*My Mortal Enemy* では語り手の Nellie が25歳上の Myra との出会いとその最期を思い出す。*A Lost Lady* も例外ではない。この作品は、3、40年前にもてなしのよさとその雰囲気の魅力のために鉄道の貴族階級すなわち鉄道関係者によく知られた家があったという紹介で始まる。その家があったのはアメリカ中西部 Burlington Railroad 沿いの灰色の町のひとつ Sweet Water の郊外で、それらの町は今日ではもっと灰色になっている。過去を振り返る姿勢と、現在は過去よりも灰色であるという態度が印象づけられる書き出しである。土地の歴史は浅いながらも、ここでは人々の間に階級の別があることもわかる。

Vintage 版で150ページのこの中編小説では、鉄道建設者の一人 Captain Forrester の妻 Marian を中心に話が展開する。かつては開拓者の夢見る力で切り開かれ栄えていた町の景気が悪くなるに従って、Forrester は健康と財産を徐々に失いついには死に至る。名誉よりも物質的成功を重視するようになった人々の間では彼の生き方はもはや受け入れられないのである。彼より25歳若

A Lost Lady における Nielの視点と夫人像について

酒 井 三千穂

I

Willa Cather (1873-1947) が最初の小説 *Alexander's Bridge* を出版したのは1912年、彼女が40歳も近くなってからである。それまでに短編集、詩集は出版していたものの、主に雑誌、新聞の記者、編集者あるいは学校教師として生計を立てていた。職業的な作家としてのスタートは遅かったが、故郷アメリカ中西部のネブラスカの土地や人々、修行時代の様々な経験がよい素材となって読者、批評家たちに受け入れられる作品を次々に発表した。日本でおそらく一番よく知られている *My Antonia* を1918年に出版、青年の参戦経験を扱った *One of Ours* を1922年に出版、翌年の1923年にピューリッツァ賞受賞。ここで取り上げる中編小説 *A Lost Lady* (1923) をはじめとする中期の作品には、*The Professor's House* (1925), *My Mortal Enemy* (1926), *Death Comes for the Archbishop* (1927) などがある。その後もコンスタントに作品を発表しつづけ、晩年の1945年にも短編 "The Best Years" を完成するなど最後まで創作欲は衰えなかったようである。

時代的には Hemingway, Dos Passos, Dreiser, Fitzgerald, Faulkner などの活躍の時期とも重なり、特に Fitzgerald への Cather の影響については複数の批評家が触れている¹⁾。今の時代から振り返れば、彼の *The Great Gatsby* (1925) は当時のアメリカ社会を描ききった代表的な作品のひとつと見られ、Cather の作品はそれに比べるとむしろ影が薄い。近年のフェミニズム批評は別として、アメリカの女性作家、あるいは地方主義作家の一人として位置付けられてきたようである。しかし、*A Lost Lady* と *The Great Gatsby* を比べてみれば、登場人物、作品のテーマ、技法などの類似が明らかに見られる。さら